

金 大 中

十一月十六日公示された韓国の大統領選挙は、一盧三金の有力四候補の争いで十二月十六日の投票日に向けて激しいぶつかり合いが始まった。時にはそれが、反対陣営に投げつけられる卵や催涙弾であつたりする。来年のオリンピック・ソウル大会を前にして、韓国は今大きく揺れている。大統領の直接選挙は朴正熙が三選を果した一九七一年以来、実に十六年ぶり。政治の民主化を、国民が選択する権利を手にするまでには多くの犠牲や障害があり、充分な要因が市民・労働者を運動に加わらせた。まず一月に起きたソウル大生の拷問死事件、四月には全斗煥大統領の改憲論議中断宣言に抗議する学生デモ。六月の集会（ソウル大生拷問死関連）を機動隊が完全封鎖。さらに全斗煥→盧泰愚の政権交替を印象づける与党民正党の大統領候補選出などがあげられる。

今回審判を下す有権者は約二千五百六十万人。その半数以上は前回の選挙を知らない二十代、三十代の世代が占める。当然得票数に大きく影響が予想される若い世代、特に学生に人気ナンバーワンの金大中を「本命」とよんで氏の正面の顔を垣間見ることにはしたい。

▼キム・デ ジュン 一九二五年十二月、韓国全羅南道生まれ。海運業、木

浦日報社長を経て、一九六〇年政界へ進出。当時の民主党に所属。一九七一年朴三選を阻む勢いで大統領選に立候補、善戦。

▼金大中拉致事件 一九七三年八月、反朴政権打倒大会の為来日中にホテル・グランドパレスから拉致される。今年九月、李厚洛元KCIA部長が「事件は自分がやった」と証言する。

▼光州事件 一九八〇年、百八十九人の死者を出した事件の黒幕として死刑判決を受ける。

▼国外追放、獄中生活、自宅軟禁 一九八五年二月、二年ぶりの米国からの帰国はアキノ氏暗殺の再現も思わせた。自宅軟禁の様子は故青地農氏が自宅を訪ね、雑誌『婦人公論』（74・1）などにも載った。

不屈の人、金大中を支援する声はもう無視できない。政府は闘う土俵を彼に与える時が来ているのではないか。

(S・S)

創刊号切抜帖

平凡・週刊平凡

一九八七年（昭和六十一年）秋、惜しまれながら、二つの雑誌が「さよならー」を告げた。一つはその昔、サブタイトルに、「歌と映画の娯楽雑誌」と謳った『平凡』、もう一つは同じマガジンハウス社の『週刊平凡』だ。

昭和二十年十一月、『平凡』が創刊された。文芸物が中心で、大きさはA5判。当時定価一円のこの雑誌三万部が、一日で売り切れた。大きさがB5判と大型化し、娯楽誌に衣替えしたのは、昭和二十三年一月号からだ。その頃の『平凡』を捲ってみると、今は亡きチャンバラ映画の大スター阪東妻三郎や、大女優田中絹代がいた。小津安二郎映画の永遠のマドンナ原節子。大ヒットした『憧れのハワイ航路』を歌った岡晴夫。映画『二十四の瞳』の高峰秀子。『君の名は』の佐田啓二と岸恵子。空前の大ヒット曲、『リングゴ追分』を歌い、歌謡界の女王となった美空ひばり。来日したマリリン・モンロー。『エデンの東』のジェームス・ディーン。『ローマの休日』のオードリー・ヘプバーン。そして昭和三十一年八月号のグラビアに、初めて石原裕次郎が登場した。兄・石原慎太郎とヨットに乗ったモノクロ写真だ。

昭和三十四年五月『週刊平凡』が創刊された。最初のグラビアは、後楽園球場のグラウンドに躍動する、ミスター

「週刊平凡」創刊号
「平凡」1955年5月号

プロ野球長嶋茂雄の若き日の姿だった。その頃の『週刊平凡』には、日活映画全盛時代のスター石原裕次郎、北原三枝、小林旭、芦川いづみ、浅丘ルリ子、渡哲也、吉永小百合の顔が毎週続いた。戦後の混乱期に創刊された『平凡』は、スターの世界に見惚れるファンの夢を代弁し、読者はスターに夢を託した。しかし今や誰でもが、ハワイで泳ぎ、マンハッタンを歩き、ベニスでゴンドラに乗れる。外車を走らせ世はスキー、夏はウインドサーフィン。今や夢は現実となり、夢そのものがなくなってしまった。

一九八七年（昭和六十二年）、石原裕次郎がこの世を去り、長嶋茂雄が汗と涙を流した後楽園球場も、ジャイアンツ最後のスター江川卓と共に、記憶の中に消えていった。「時代の流れがあらゆるものを変えていく。」夢を表現してきた雑誌『平凡』『週刊平凡』がなくなったこの年。それは日本にとって一番いい時代が、去っていった年であるような気がする。

(T・H)